

目的 前報では、急速なテンポで伝達されるファッション情報に対して、女子学生自身の服装は、学生らしさの中にも、その時どきにファッション性を先取りし、パーソナリティを表出していることを考察した。しかし服種が異なると、嗜好、意識にどのような差異と類似を生ずるか、明らかにされていない。そこで本報はジャケットを例として、着装における配色嗜好にもふれ、イメージ要因の検討を試みた。

方法 1) 被験者 短大家政科学生35名(年齢19~20歳)、2) 生地購入時期1986年、完成10月、3) 着装評価 形容詞22尺度 5段階評定、4) 検討 素材生地の鑑別、測色、色調、柄、スタイルの傾向、流行との関係を調査、5) 主成分分析法 イメージ・プロフィール、因子負荷量、個人値と色彩との対応、イメージ空間に解釈を加えた、6) 前報のドレスと比較。

結果 今シーズン、学生が最も着用したいジャケットの素材は、秋・冬物のために天然繊維のウールが殆んどであった。紺、黒、灰、赤が主流で、着装の配色嗜好は同系色の無地かチェック、モノトーンでまとめ、フェミニン感覚。イメージ・プロフィールは「落ち着いた、こころよい」、'85年ドレスは「女性的な、上品な」が最上位で、両者の差異が認められた。因子負荷量は、第1因子・可愛らしい、上品な、美しい。第2因子は・落ち着いた、こころよい、・洗い。第3因子は・個性的な、・独創的な、流行の、累積寄与率51.5%、・印はドレスと類似。したがって、女子学生らしさ、服種の特長、自己表現という共通因子が存在する。着装の行動はパーソナリティ要因に強く影響される。